

榎原考古学研究所編

近畿古文化論攷

有光 教一

奈良県の榎原神宮外苑にある榎原考古学研究所は、昭和三十七年をもって、創立二十五周年を迎えた。まことに慶賀にたえない。本書はそれを記念して出版されたもので、所長の末永雅雄博士ほか二十五氏が執筆している。

同研究所の発端は、昭和十三年からはじまった榎原神宮外苑の整備拡張に伴って出現したいわゆる「榎原遺跡」の調査にある。同遺跡の調査は昭和十六年で終わったが、その後、大和を中心とする近畿各地の遺跡の発掘調査に業績をあげ、榎原考古学研究所の名は、学界に周知されるにいたった。その事業の概要は、本書の巻末に附載する榎原考古学研究所事業略記に出ているが、おもなものだけでも百件を超える。また、その事業に参加する研究所員には、単に考古学の専門家だけでなく、文献史学、民俗学、神話学、言語学、国文学、地理学、建築史学、人類学、動物学、植物学など隣接諸学科の学者が招かれている。したがって、同研究所の特色は、これら諸学科がそれぞれの専門的立場において研究した成果を総合するところにあるべきは、言うまでもない。

いまここにとりあげる「近畿古文化論攷」は、同研究所の全研究

員の寄稿したもので、考古学の論文のみならず、右に挙げた諸学科に関する論文を含むのは当然である。多岐にわたる論題をかかげて、それぞれのエキスパートが、蘊蓄を傾けているところに本書の特徴があり、そのことが、また、榎原考古学研究所の特色にほかならないと思う。本書の内容は、すなはち、左表の如くである。

大和の古代文化

大阪府国府遺跡出土の抜歯を伴ふ又状研齒人骨追加資料

末永 雅雄

考古地理学とその課題

島 五郎

遺跡分布よりみた古代地域の考察

藤岡謙二郎

考古学における古代文化の復元について

伊達 宗泰

高床式建築考

島田 暁

前方後円墳における築造企画の展開

網干 善教

古墳中期初頭前後の古墳

上田 宏範

中期古墳の副葬品とその技術史的意義

小島 俊次

伊勢湾沿岸の函文帯神獸鏡について

北野 耕平

飯蚶壺形土器と須恵器生産の問題

澄田 正一

組合式木棺について

森 浩一

八咫鳥伝承の持つ歴史性

藤原 光輝

字陀の高城

池田 源太

日本古代における労働力の運営

角田 文衛

藤原宮の役民の作る歌

酒詰 仲男

平城京の特殊糸理

吉永 登

大和國家権力の交通的基礎

秋山日出雄

横田 健一

建築遺跡調査の発展

巨勢氏祖先伝承の成立過程

紀氏に関する一試考

穴師神社の一考察

十輪寺結衆僧について

漢代の博山炉

川の水生昆虫の遷移

古代日本の住居跡から出土する桃核について

浅野 清

直木孝次郎

岸 俊男

井上 薫

平山敏治郎

杉本 憲司

津田 松苗

小清水卓二

そして巻末に、樞原考古学研究所事業略記と執筆者紹介を加える。一々の論文について詳しく論評を加えることは評者の能力の及ぶところでないし、あたえられた紙数にも制限があるので、ひとわたりの紹介に、評者が興味をおぼえた点を加えて責をふさぐこととしたい。

「大和の古代文化」（末永雅雄）は、樞原考古学研究所が今日まで調査研究してきたところを基調として、大和の古代文化を、縄紋以前の文化から説きはじめて、大観したもので、とくに樞原遺跡や唐古遺跡、それに、主要な古墳に関する研究成果をとりいれる。古墳被葬者、营造者の問題、彼らの住民地域についての考察から宮都の問題におよび、今後の問題点を指摘して、その解決には考古学と古代史との提携が必要であると強調し、研究所長としての抱負を述べる。

評
次

「次」の島五郎博士の論文は、昭和三十三年・三十三年における、大阪府国府遺跡の調査の際発見の縄紋期人骨中の一体（壮年男性）に

認められた歯牙加工の新資料についてである。日本で今日までに報告された又状研歯人骨の分布は、ほとんど東海地方に集中し、僅かに二例が国府遺跡から出ているにすぎないという。これは単なる抜歯人骨の出土例の分布が殆んど全国に及んでいるのとは対照的であり、興味深い。

「考古地理学とその課題」（藤岡謙二郎）の考古地理学は、藤岡博士の提唱にかかり、抛りどころとする資料によって歴史地理学をわけた場合、文献を資料とする文献地理学に対立する。したがって、先史地理学とは、分類の規準を異にする。藤岡博士がこの論文では力説しているのは、考古地理学は、考古学の地理学的研究に終ってはいならないこと、考古学的な遺跡遺物が占有する歴史的空間の再編成でなければならないという点についてである。その考古地理学の立場から、奈良盆地における、古代地域の復原を試みたのが、次の「遺跡分布よりみた古代地域の考察」（伊達宗泰）である。多くの地図と表を使った三十頁を越える労作である。

「考古学における古代文化の復元について」（島田暁）は、いわば考古学研究法に関する論文で、——遺物の形態的研究を中心に——という副題がついている。著者はこの論文のなかで、古墳時代の死霊観念をとりあげて、それを円筒埴輪という遺物の用途を通じて考えようとし、それが著者の言う理論考古学の一つの試みであると説く。

「高床式建築考」（網干善教）は、弥生式文化期の住居の様式であった高床式建築について、既知のいくつかの資料とともに奈良県御所市の鴨都波神社境内発掘の建築遺構と、唐古遺跡から採集さ

れた高床式建築の絵のある土器片の、二つの新資料を挙げて考えたもの。

「前方後円墳における築造企画の展開」（上田宏範）は、十枚の挿図と七個の表を用いて、日本古墳墓中もつとも特色ある前方後円墳の墳形を、地割あるいは設計の問題に焦点をあわせて、型式学的研究の基盤、基準設計の存在、基準設計の拡大と縮少、変異型の発生などについて検討した力作。昭和二十五年以来この問題を説き続けてきた著者の纏めとも見られる。

「古墳中期初頭前後の古墳」（小島俊次）は、まず資料を列挙し、外部施設、内部構造からの観察と、副葬品からの観察とを、多くの表を援用しながら行ったもの。また「中期古墳の副葬品とその技術史的意義」（北野耕平）は、鋳留式甲冑の出現の事情を経とし、その製作者の問題と技術上の問題を緯とした考古学的考察であって、初期馬具の問題や鍍金製品の問題、さらに、帰化工人による新技術導入の意義に説き及ぶ。

「伊勢湾沿岸の画文帯神獸鏡について」（澄田正一）は、三重県多気郡神前塚発見の画文帯神獸鏡から説きはじめて、神島八代神社の画文帯神獸鏡、岡崎市の亀山古墳と名古屋市の双子山古墳から出土した画文帯神獸鏡について述べ、四世紀から五世紀にかけての頃の伊勢湾沿岸と畿内との政治ないし文化の関係を説明する一つの有力な手がかりなることを指摘する。そして、榑田川を溯るルートと吉野川ルートとの結びつきを示唆した。

「飯蛸壺形土器と須恵器生産の問題」（森浩一）は、大阪湾沿岸出土の飯蛸壺と呼ばれる小型土器を主題とする。それは弥生式前期

以来の長い伝統をもつ漁具である。その機能を効果的にするための工夫が、時間の経過とともに形態や型式の変化を生んだことを概観し、大阪府南部における須恵器窯出土の飯蛸壺形土器を論じて須恵器編年との対比を試み、須恵器生産の変遷に及んだ示唆に富む論文である。

「組合式木棺について」（藤原光輝）は、まず、奈良県三倉堂および大阪府土保山古墳発見の組合式木棺の実例について、構造をあきらかにしたのち、近年の綿密な発掘調査によって組合式木棺の存在が推定されたいくつかの古墳例をあげて比較検討し、次いで原形が組合木棺であったと推測される長持形石棺や組合式石棺の類を参照しながら、その構造や埋葬法についての考察を行った論考である。十六葉の挿図と多数の表が添えてある。

「八咫鳥伝承の持つ歴史性」（池田源太）は、神武紀に出てくる頭八咫鳥伝承は、鴨氏の氏族伝承としてトーチミズムの性格をもつが、その点、大伴氏の氏族伝承とも関係があらうと説く。そして、古代大和の氏族を越えて、ひろく世界各地で知られている動物説話との比較を試みる。鳥類の持つ神異、とくに鳥という鳥が英雄の巡遊あるいは戦争にあたって援助する性質を与えられていたことが、人間の歴史の一般性の中に考えられると主張する。

「宇陀の高城」（角田文衛）は、奈良県宇陀郡菟田野町佐倉の桜実神社背後の丘陵に比定される宇陀の高城を、穿邑そのものの遺跡ではなく、穿邑の逃げ城であり、同時に部族国家の首長たる魁師の居城であったとの解釈をとり、この意味での高城は、避難所と王の居城という二重の性格を帯びていたと主張する。そして、神武東征

説話を適確に理解するための分析を試みて歴史的発展段階を考え、宇陀の高城の地形がこれにふさわしいと説く、本論文は、副題を神武東征説話の一解釈とするが、傾聴すべき所論である。

次の酒詰博士の「日本古代における労働力の運営」は、副題のとおり、特に先史考古学の立場から述べられたもので、奴隸時代の実態は、先史考古学によって実証され、その遺跡と遺物の解釈によって明らかになるべきものであると結ぶ。次の吉永登博士の「藤原の宮の役民の作れる歌」は、この歌の作者が柿本人麻呂であろうとの説を採り、また藤原宮の用材を運搬するのにどの道筋をとったかを考えた論文である。また「平城京の特殊条里」（秋山日出雄）は、著者が条里制地割を実地について調べて平城京と周辺地割との関係をつきつめているうちに見出した大和国添上郡京南辺条里なる特殊条里の存在と、そのアウトラインを述べたもの。「大和國家權力の交通的基礎」（横田健一）は、まず、古代國家においては、貢租の形態と、道路、航路、輸送等のそれを受けられる施設と手段が重大な問題であったことを観察する。次いで、貢賦説話と貢租およびその運搬形態を、遠方から来貢する外国人の場合、国内豪族の場合、徭役労働の場合にわけて、表を使いながら論じ、最後に、三関と近江の項を設けて、上代の交通を阻害した要素を考える。横田教授は、三関ができたのは近江朝の末年であろうと論証している。

浅野清博士の「建築遺跡調査の発展」は、宮殿や寺院などの遺跡の発掘調査について、今日までの経過を述べ、発掘事業の発達進歩の状態をあきらかにする。第二次世界大戦までの建築遺跡の調査では、法隆寺大講堂の地下発掘、斑鳩宮跡と若草伽藍の開明が主要なもの

であり、戦後においては平城宮跡の発掘と飛鳥寺院跡の発掘がとくに注目をひいたものであるとする。これからの大規模な建築遺跡の発掘は、発掘技術の高度の進歩と相俟って、組織化された研究機関が恒久的事業として遂行しなければならない段階にきていると喝破する。

「巨勢氏祖先伝承の成立過程」（直木孝次郎）は、日本古代における有力氏族の一つ、巨勢氏の祖先系譜の成立過程についての見解を述べる。古事記にみえる建内系譜をはじめ巨勢氏の祖先に関する諸伝承を詳しくかえりみて、古事記や日本書紀に巨勢氏の祖先伝承がすくないのは、巨勢氏が六世紀以後の新興氏族であって、当時の史官がその伝承に権威を認めなかったからであろうとする。また「紀氏に関する一試考」（岸俊男）は、紀氏とその同族が、大和朝廷の朝鮮経略に重要な役割を演じた所以を考究したものの。紀氏は、地理的位置と自然的環境によって、タスのような船材に恵まれていたこと。外洋航行に耐える大形船建造の可能であったこと、瀬戸内海の要地に同族を分布せしめたこと、そしてかくの如き基礎の上に立って、大和朝廷外征軍の主力となり得たことを論証した力作である。

「穴師神社の一考察」（井上薫）は、和泉の穴師神社、これと関係深い大和の穴師坐兵主神社・穴師大兵主神社に祭る神の名および神の本質に関して、吉田東伍、内藤虎次郎ら諸学者の説をあげて問題を提起し、それをあきらかにしようとした論文である。「十輪寺結衆僧について」（平山敏治郎）は、大和の田原卿の十輪寺結衆僧仲間を主題にして、その寺院生活、村落における僧侶の社会的地位及

び村落家族と僧侶との階層的な関連について解明した論文。文献に即した忠実なあとづけが試みられ、その事実が、生活の慣行、伝承的な文化であることよって、さらに大きな意味を持つと説いた五十三頁に及ぶ力作。

「漢代の博山炉」（杉本憲司）は、博山炉がいつ頃からあらわれ、漢代を通していかに変遷しているかを、最近の文献などを参照しながら考察し、薫炉が何故墓の中に入れられるようになったかに論じ及ぶ。

「川の水生虫の遷移」（津田松苗）は、奈良県下の下川の動物相を多年研究してきた著者が、そのデータをもとにして、水生昆虫の遷移について新たな考えを発表したものの。また「古代日本の住居跡から出土する桃核について」（小清水卓二）は、日本各地の古代住居跡から発掘された。桃核を形態的に比較研究した結果の発表であって、資料の中に、法隆寺金堂外陣の柱の上部の貫頭溝の底にあった空洞の中におさめられてあった桃核もあるのは興味深い。

以上、本書に取められた論文の一つについて、簡単に紹介したが、すでに与えられた紙数を越えようとしている。

執筆者の大部分は、現在それぞれの専攻分野で活発な研究活動をしておられる学者であり、本書に寄せられた論文も、過去に積み上げた業績を踏まえた上で、最近の見解を表明されたものが多い。こ

れは当然のことながら、学界に刺戟を与え、関係の研究者を啓発するものと感謝したい。樞原考古学研究所編の論文集であるけれども、純粋に考古学の論文と言えるものは、半ばに足りず、隣接諸学科の論文が半数以上を占める。これは、冒頭に触れたように、同研究所の研究態度を反映するものであり、本書を特色づけている。したがって、本書のすべての論文にわたって精しい論評を加えることは、評者のよくするところではなく、以上のような簡単な紹介にとどめるよりほかない。それでも、なお評者の狭い知識の故に正しい理解が出来なかつたことをおそれる。ただ本書の書名「近畿古文化論攷」の枠内に入らない論文がいくつかあるのは、気になる。近畿地方の疆域を越えて一般論となったもの、別の地域の問題を取扱ったもの、あるいは、古文化とは直接つながらないものも含まれている。これは、全所員の寄稿を期待した出版物としてやむを得なかつたところであろうが、せめて、本書の書名にそのような内容のものに揃えてほしかつた。しかし、論文の配列に苦心のあとが認められるし、論文はそれぞれが珠玉の一篇である。ここに浩瀚な論文集を発売された樞原考古学研究所と執筆者である全研究所員各位に敬意を表し、今後の発展を祈る。（A5判六四四頁 昭和三十八年二月 吉川弘文館発行 定価三五〇〇円）

（京都大学教授）